公共施設再見

第３回　新島村温泉ロッジ（上）

『地下鉄の電車はどこから入れるんでしょう？それを考えると夜も眠れない』こういう漫才のネタがありますが、温泉ロッジの営業はいつから始まるんでしょう？それを考えると……。こちらは眠ってはいけない。宿泊客の安全や要望に応えるため 24 時間、人員を配置して様々な事態に対処できるようになっていなければいけない。

議員は昨年末、現場を訪れ、どういう仕事をしているのか色々と話を訊いた。まず運営の中身は、終日は３人態勢で朝７時から昼は 12 時までやり、夕方６時から夜９時までの組と朝９時から 11 時までやって休憩をとり昼は 12 時から夕方６時までやる組に分かれる。これに雑役のパート１人分（３人で都合をつけて分けあう）が加わる。この基本シフトに客の入り込み状況に応じて互いに時間を融通しあって帳尻をあわせる。あと宿直専門要員が１人、夜９時から朝７時まで務める。

温泉ロッジの全景。

仕事の内容は部屋の清掃、ふとんカバーやシーツの交換、この作業は宿泊客のチェックアウト（朝 10 時）と次の泊り客のチェックイン（正午）の間に済ませるから、混みあっているときは大変そうだ。他に玄関・ロビー・通路それと浴室の清掃、浴衣、シーツなどの洗たくをし、肝心の接客があり、予約の電話対応、客の送迎・相談受付、そして大事な帳簿の記載と現金の管理などがある。この金銭出納の扱いは一日の終わりに集計し、ある程度現金が貯まったら（一週間ほど）産業観光課の担当に引き渡しチェックを受けるという。

すっきりした和室のたたずまい。

温泉ロッジの会計は一般会計とは別個の独立した特別会計であり、ここに収入と支出を計上して経営の状態を見ることになる。これまでの実績は、過去3カ年の決算書から洗い出してみると、収入で一番大きいのは当然、宿泊料。1,640 万円（平成 25 年度）、1,680 万円（平成 26 年度）、1,740 万円（平成 27 年度）と推移していて毎年少しずつ伸びている。残念ながらこれは特殊要因に基づくもので、中学校、高校の新築工事の関係者の常宿となっていたことが大きい。同じように入浴料も伸びていて 76 万円→ 95 万円→ 111 万円（同様に古い年度順）となる。あとレストラン使用料が毎年 60 万円ずつ入ってくる。これらが事業収入のすべてとなり、通常の平均的な収入は 1,700 万円程度か？

支出の方をみると適性かどうかの判断は中々難しい（客が増えれば、当然支出は増え、無駄かどうかの判定は数字だけでは決めがたい）。中間の平成 26 年度では施設の管理費が 470 万円。このうち光熱水費、保守点検委託料、燃料費で全体の 85% を占める。もう一つの営業運営費は 1,270 万円。業務賃金、消耗品費、税金の支払いで全体の 96% になる。両者合わせて 1,740 万円（この年度は 130 万円の利益）。

これらは宿泊施設をやっていく上で当然発生する経費で、無駄を省くことは言うまでもないが、サービス産業であることを考えると単に節約すればいいということにはならない。実際、ほぼ固定費であり、合理化の余地がないとは言いきれないが、節減幅は小さいとみてよい。先ほどの事業収集と合わせて考えるとざっと 1,700 万円、これが非常に大事なポイントになり、赤字と黒字の分岐点となる。今後ここを一つの拠り所にいかに収入増をはかるか、端的に言えば客足を増やすか、が存続していくための鍵となる（次号に続く）。